

前
入 学 試 験 問 題
国 語 (文科)

(配点一二〇点)

平成二十三年二月二十五日 九時三〇分～一二時

注 意 事 項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で二十一ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 四、解答用紙の指定欄に、受験番号(表面二箇所、裏面一箇所)、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 六、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 七、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。
- 八、この問題冊子の余白は、草稿用にしてもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 九、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
- 十、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第四 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

石狩アイヌの豊川重雄エカシ（長老）の自宅脇にある素朴な作業小屋のなかは、燃える薪のなつかしい匂いがした。あたりには、エカシが彫ったばかりの儀礼具の見事なマキリ（小刀）の柄やイナウ（御幣）が無造作に置かれ、それらに使われたクルミやヤナギ材の香りが淡く漂っている。

立派な顎髭^{あごひげ}のエカシは火のそばに座り、鋭い眼光に裏打ちされた人懐っこい微笑をうかべながら、おもむろに、壮年のころの熊狩りの話をはじめていた。アイヌの聖獣である熊とのあいだに猟師が立ち立てる、繊細な意識と肉体の消息をめぐる豊かな関係性の物語である。エカシにとつての熊は、幼少の頃から、コタン（聚落^{しゅうらく}）の外部にひろがる「山」という異世界をつかさどる神Ⅱ異人として、人間が人間を超えるものとのあいだに創りあげる物質的・精神的交渉、すなわち「普遍経済」と呼ぶべき統合的なコミュニケーションの世界を、凝縮して示す存在だった。その驚くべき話のなかでも私がとりわけ興味を惹かれたのは、エカシが「無鉄砲」という日本語をたびたび援用しながら語る、丸腰での熊狩りの冒険譚^{たん}だった。

古くは弓矢、近代になれば鉄砲を武器として山に入り、アイヌはヒグマを狩った。いうまでもなく、アイヌ（人間）とカムイ（熊）との関係は捕食者と獲物という一方的な搾取関係ではなく、互酬性の觀念にもとづく純粹に贈与経済的な民俗信仰のなかにあった。そこでは熊の肉体とは神の地上での化身であり、毛皮や肉を人間へと贈り届けるために神はヒグマの姿をとって人間の前に姿をあらわすのだった。熊狩りによって人間はその贈与をありがたく戴^{いた}き、感謝と返礼の儀礼として熊神に歌や踊りを捧げること、熊の魂を天上界へとふたたび送りかえすことができると考えられていた。そして熊をめぐるこうした信仰と丁重な儀礼の継続こそが、熊の人間界への継続的な来訪を保証するための、アイヌの日常生活の基盤でもあった。

豊川エカシもまた、こうしたアイヌの熊狩りの伝統に深く連なり、また自ら石狩アイヌの長老として、すなわちもつとも徳ある狩人の一人として、神の化身たる熊と山のなかで対峙^{たいし}してきた。炉端の話のなかで、アイヌの熊獲^とりたちの潜在的な意識のどこかに、武器無しで熊と闘い、これを仕留めるといふ深い欲望が隠されていたことをエカシは私に示唆した。現にエカシ自身が、意図的に鉄砲を持たずに山へ入ることがままあったというのである。その場合でも、熊との遭遇をことさら避けたわけではない。むしろどこかに、遭遇への強い期待があつた。鉄砲を持つことで自らの生身の身体を人工的に武装し、そのことによつて狩るものと狩られるもの、すなわち獵師と獲物という一方的な関係に組み込まれることを潔しとしない、すなわち搾取的関係から離脱して、熊にたいして自律的な対称性と相互浸透の間柄に立とうとする無意識の衝動を、私はエカシの口ぶりから感じとつて、ひどく興味をそそられた。

そのとき、エカシはさかんに「無鉄砲」ということばを使うのだった。あの日、山に入つたときは「無鉄砲」だったから、いつもより心のなかが騒いでいた……。『無鉄砲』のときだから、とりわけ丹念に熊の足跡を探り、土や草についた獣の匂いをかぎ分け、不意に熊のテリトリーに踏み込まないよう注意した……。『無鉄砲』の熊狩りが報われて、熊と諸手で格闘して仕留めたこともある……。山を『無鉄砲』に歩くことほど、深く豊かな体験はない……。

こうした奔放な語り口に惹き込まれつ、^ア私のなかに奇妙な違和感が湧いてくる。丸腰で熊の棲^すむ山に入ることとはきわめて危険なことであり、すなわち『無鉄砲』であることは、まさに字義通り、後先を考へない「向こう見ず」で「強引」な行為であるはずだった。ところがエカシの使う「無鉄砲」ということばを、そうした「無謀」という意味論のなかで理解しようとしても、不思議な齟齬^{そご}感が残るのだった。いやむしろ、エカシは「無鉄砲」なる語彙を、「きわめて慎重」で「繊細な感覚」という正反対の意味で使用しているのだ、とわかつたとき、私の理解のなかにあらたな光が射し込んできた。『無鉄砲』という和人の言葉をあえて借用しながら、熊と人間のあいだに横たわる「鉄砲」という武器の決定的な異物性を、エカシはパロディックに示唆していた。しかも、鉄砲を放棄することで、アイヌの獵師がいかに繊細な身体感覚を通じて熊の野生のリアリティにより深く近づいてゆくかを、エカシの物語は繰り返して語ろうとしていた。『無鉄砲』であることは、必然的に、人間の意識と身体を、裸のまま圧倒的な野生のなかにひととおも

に解放し、異種間に成立しうる前言語的・直覺的な關係性に自らを開いてゆくための、いわば究極の儀式であつた。無鉄砲とはすなわち、人間が野生にたいして持ちうる、もつとも繊細で純粹な感情と思维の統合状態を意味していたのである。

「無鉄砲」という日本語表現は、それじたいは「無点法」ないし「無手法」(方法無しに、手法を持たずに)という用語の音変化とされる一種の当て字である。だがこの用語は、近代日本文学の聖典ともいうべき夏目漱石の『坊ちゃん』冒頭のあまりにも良く知られた「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る」という一節によつて、その意味論を封鎖されてきた。豊川エカシは、近代文学の正統によるこの語彙の意味論の固定化の歴史など素知らぬふりをしながら、見事に、「無鉄砲」なる語彙にかかわる私の言語的先入観を粉碎した。そのうえで、武器を持たない熊狩りの繊細な昂揚感こうようかんを、エカシは転意された「無鉄砲」という言葉の濫用によつて私に刺激的に示したのである。個人の意思や行動の持つ強引さ、無謀さの印象はたちまち消え、北海道の山野のなかに身体ごと浸透してゆく集団としての人間たちの慎重で謙虚で強韌な意識の風景が、私の脳裡のうりに立ち現れてきた。鉄砲を持つとうが持つまいが、アイヌたちが熊と対峙するときつねに参入しているにちがいない、^エ象徴的な交感と互酬的な關係性の地平が、奥山にかかる霧もの彼方かなたから少しずつ近づいてくるようだった。

(今福龍太「風聞の身体」)

設
問

- (一) 「私のなかに奇妙な違和感が湧いてくる」(傍線部ア)とあるが、どういふことか、説明せよ。
- (二) 「熊と人間のあいだに横たわる『鉄砲』という武器の決定的な異物性」(傍線部イ)とあるが、どういふことか、説明せよ。
- (三) 「その意味論を封鎖されてきた」(傍線部ウ)とあるが、どういふことか、説明せよ。
- (四) 「象徴的な交感と互酬的な関係性の地平」(傍線部エ)とあるが、どういふことか、説明せよ。